



report 01 韓国・蔚山広域市を訪ねて—韓国の高い志に脱帽—

この5月23日から26日まで、新潟市の交流協定都市（2006年9月締結）である韓国・蔚山^{ウルサン}市に、友好交流事業の一環として水辺環境視察に、会員10人（大熊孝・宏子・梶・大崎・加藤・香田・山岸・佐藤・横山・長谷川）と新潟市職員2人（諸橋・斎藤）で訪問してきた。



対岸の大和江大公園まで渡るための竹で作られた渡し舟

蔚山^{ウルサン}市は釜山の北北東約50kmの日本海に面した都市である。ここは加藤清正が約410数年前に侵攻・築城して敗北した地であるが、蔚山^{ウルサン}市は熊本市とも2010年に友好協力都市の締結をしている。この蔚山^{ウルサン}市の人口は、1962年に85,000人に過ぎなかったが、現代自動車、SK（石油化学工業）などの韓国を代表する企業が集積し、2012年現在117万人都市に成長している。その平均人口年齢は35.9歳で、韓国内最低である。因みに、新潟市の人口は1970年に63万人（現市域）、現在81万人であり、その平均年齢は43.3歳である。

このように成長し続ける若い都市であるから当然さまざまな環境問題を惹起してきた。特に、蔚山^{ウルサン}市を貫流する太和江（流域面積643.9km²、流路長47.5km、規模的には三面川クラス）の水質が極端に悪化した。それを、1990年代から行政と産業界、そして市民が協力して、2005年には再び泳げる川に復活させたというのである。その市民の中心が社団法人太和江保全会であり、その有志13人が昨年7月新潟を訪問し、新潟水辺の会が新潟市に協力して福島潟、鳥屋野潟、佐潟、信濃川、通船川、新川などを案内した。今回の訪問はその交換交流ということでもあるが、我われとしては、どうしたらそのような水質改善が叶えられるのか、直に検分したかったのである。

結論は単純で、徹底的に汚水を浄化して川・海に排出しているということであった。日本の排水基準は下水道であれ、企業からの排水処理水であれ、BODで20mg/Lである。韓国の統一基準ではこれが10mg/Lである。さらに四大河川といわれる漢江、洛東江、錦江、榮山江はこれより厳しい基準が設けられているとのことであるが、太和江では3mg/Lを事業協約基準にしていた。これにより、家庭排水に限らず、工場などからの基準に満たない処理済み排水も下水処理場での浄化を義務づけた。そして、我われが訪れた太和江を放流先とするクルファ下水処理場は管理目標値2.8mg/Lに対し、現実の排水は1～2mg/Lであった。なお、同市の下水処理規模は計7ヶ所で日当たり61.4万m³であり、新潟市の約2倍の量になる。



表敬訪問後の市庁舎で、朴市長と一緒に記念撮影
（向かって右から三人目が朴猛雨市長）

水質改善をここまで徹底的に放流するならば、泳げる川になるのも当たり前といえる。この水質改善には蔚山^{ウルサン}広域市長の朴猛雨^{パク・メンウ}氏の指導力が大きく貢献していると感じた。朴猛雨は長くの蔚山^{ウルサン}広域市の行政に携わり、2002年から3期連続でその市長となっている。なお、覆っていた高速道路を剥がして清溪川^{チョンググチョン}を復活し、ソウル市長から大統領になった李明博氏の例に習い、太和江の水質改善した朴猛雨氏も大統領への期待が高いことを聞かされた。

それはともかく、清溪川にしろ、太和江にしろ、韓国が「経済と環境が調和した良い国をつくろう」という高い志のもと行政・市民・産業界が強く連携していることを実感した。

NPO 法人 新潟水辺の会代表 大熊 孝

report 02 蔚山市との交流訪問によせて

新潟市の国際交流事業の一環である蔚山市との交流訪問において、今回、NPO 法人新潟水辺の会の代表団 10 名の皆さんとともに、本市を昨年度訪問された社団法人太江河（テファガン）保全会の活動の状況及び蔚山市の水環境保全対策などについて、思ってもいない機会を得て蔚山市を訪問し目の当たりにすることができました。

このたび、新潟水辺の会の会報をお借りして、蔚山市の水環境保全対策と両会の交流発展について、恐縮ではありますが記載させていただきます。

○ 蔚山市の水環境保対策について

すでに新潟水辺の会の会員の皆様もお読みになったと思いますが、蔚山市を訪問された代表団の方々が掲載された HP 記事や新潟日報社の記事に掲載された「BOD 排出基準（事業協約値）3mg/L」、「工場排水の下水処理場での再処理」及び「下水処理水は BOD1-2mg/L」というのは環境担当者としても非常に驚きでありました。蔚山市の下水処理規模は、2日目の環境交流会で頂いた資料によれば日当たり 61 万 4 千トンであり、蔚山市のグリーン環境経営を表明した「エコポリス蔚山宣言」のもと、テファガン水質改善事業やテファガン大公園造成事業といった総合的ウォータープラント計画の一環として、完璧な下水処理体系を構築したとしています。

このテファガンの水質改善及び川辺のゆとり空間造成には、計 43 事業で 7,554 億ウォン（現在の為替レートで約 605 億円）が支出されたとのことでした。そして、地域環境ガバナンス体系の構築の1つとして、新潟水辺の会さんが通船川で行っていますが、河川清掃や有害植物の駆除のために担当区間を設定し企業も参加する「1 団体 1 河川推進運動」（48 河川の 131 区間）を実施しているところは参考となる事業でした。

また、累積約 2 兆ウォン（約 1,600 億円）を投資し市内 295 社と大気汚染改善に係る自立環境管理協約を締結するなど費用的にも徹底した環境保全を図っていました。

○ 両会の交流発展について

昨年度の新潟市での交流に参加できなかったことは今思えば非常に悔やまれますが、事前勉強で見せていただいた新潟水辺の会さん制作の交流記録などから、この交流にかける意気込みが溢れていました。今回の

訪問によりその思いはテファガン保全会からも非常に強く感じられました。

両会の交流活動を深め、さらに両市を代表する交流として広く知ってもらうためにも、この 2 ヶ年の相互訪問は顔の見える人的交流として継続して発展させていただきたいと思います。既に蔚山市訪問の最終日に加藤事務局長より、今回の訪問についてギャラリーでの展示に合わせて、テファガン保全会の活動1つである「テファガン保全子供ポスターコンクール」の入賞作品をお借りして掲示したいと提案されたことは交流継続の1つの証になると考えています。

また、パク蔚山市長を表敬訪問し意見交換会の際に梶副代表から「鮭」の食文化について話をされ、蔚山市では鮭の食文化は無いが秋に鮭祭りを行ったということから、新潟水辺の会さんは「鮭」に取り組んでおり、「鮭」はこの交流のキーワードの1つになるのではないかと思います。

そして、新潟水辺の会さんと言えば、全国各地に会員がいらっしゃるということから、姉妹都市の萩市や友好都市の熊本市の団体とネットワークを深めて、市役所間の連携もサポートも得ながら、オールジャパンとして交流を継続発展する1つの基礎になるのではないかと思います。



今回対応して下さったテファガン保全会の皆さんと蔚山市職員とともに（最終日、蔚山空港にて）

最後に今回の蔚山市訪問のまる 4 日間は、新潟水辺の会の皆さんと活動を共にする貴重な時間であり、会報の紙面まで頂いたことに誠に感謝いたします。

新潟市環境部環境対策課
齋藤 雅志
(寄稿)

「自然と人間の調和するエコポリス」 蔚山市

『맨 얼굴이니까 찍지 마세요』。女性の怒鳴り声が後ろで聞こえ、びっくりして振り返った。韓国・蔚山市を訪問して3日目、蔚山の景勝地・スルド(瑟島)を見学してバスへ戻る時であった。

かつて10万人に満たなかった蔚山市が、自動車、造船、石油化学などの工業化、近代化により発展し、現在は117万人を要する都市に発展した。だが工業化と都市化により河川環境も悪化した。

1996年テファガン(大和江)で生物化学的酸素要求量(BOD)は1リットル当たり11.3mgだったが、2011年には1.9mgに改善し川で泳げるまでにしたという。その原動力は何であるのかを学びに蔚山に訪問した。

初日、朴孟雨(パク・メンウ)市長への表敬訪問したとき横山さんが、「環境と産業の折り合いをどう付けているのか」と質問した。



表敬訪問の質問に答える朴孟雨市長

これらに対して朴市長は、30分の表敬訪問時間を1時間に伸ばしてくれ、「産業を発展させようとする環境が破壊される。二つの関係は相反する関係であるが、次元を代えればお互いを保護することが共通している。経済が発展してゆくことで所得が上がってゆく。その原資を使い、環境改善に投資していく。環境を変えることで産業界が目を向けてこの蔚山に進出してくれる。そしてもっとその地域に投資していくことが出来る。経済が先か、環境が先かであるが、その時の状況に寄って経済が先だと説得する。ある時は環境が先だと行政が説得していく。結果的には環境と経済がお互いに調和してゆくことが大事。お互いに話し合って解決し、共存し発展させてゆく」と答えて、それを女性通訳のキム・ジョンオクさんが丁寧に訳してくれた。

話をスルドに戻す。スルドはウルサンのバンオジン(方魚津)の最南端ソンクン村に位置し、日本海(韓国名で東海)を挟んで250km先に山陰地方がある。

波が小さな島にぶつかって出す音がまるで、琴の音のようだということから「スルド(瑟島)」と呼ばれ、韓国有数のドラマの撮影地となっている。



マンション建設を背に、2人の海女さんが歩いてくる

丁度私の後ろにいた新潟市国際課の諸橋さんに「何と言ったの」と聞いてみると、ウエットスーツに身を包み大きな道具を背負い、海に向かうたくましい海女さん二人がいた。彼女は怒って言った訳でなく「お化粧しない私を撮らないで」と言う。ほほえましいものであるが、日本人の私たちには怒鳴っていたかの様に聞こえた。

昨年来日した通訳のヨ・ユニさん、テファガン保全会事務局長のキム・スクチャさんなど輝いて働いている女性と、海女さんたちの存在が私の目にダブった。

蔚山は2011年度輸出額、一人当たりのGDPは韓国一であるという。訪問初日、韓国新幹線のKTXで蔚山駅に着いて最初に目に飛び込んできた建設中の高層マンション、そして道路、橋など。この日は土曜日で工事はお休みのようだ。だが沖を見渡すと、数万トンの大型船15隻以上が荷物を降ろすための順番で沖待ちをしている。好調の経済を牽引している蔚山市の縮図と、韓国の経済の原動力の底に、日本同様に韓国女性の進出とたくましさを垣間見た。

蔚山市・朴市長の力強いリーダーシップで改善できた環境の手本を基に、経済成長の少ない新潟の私たちも、行政、市民、企業が知恵と志を出し合えば「まだやれば出来るぞ」と実感した蔚山市の訪問であった。

世話人 加藤 功

上田市浦野川での発眼卵着床実験（報告）

「水枯れの大河・信濃川に鮭の道を拓く」この活動が始まった頃は、本当に鮭は長野県まで上れるのだろうか、多くの人が不安に思ったことである。2006年に地球環境基金からの助成を受けて、始めたこの事業は壮大なものであった。私はその頃まだ会員ではなく、当時を想像しながら思いをめぐらし記述している。

2009年に三井物産環境基金からの助成を受けた頃から関わることとなった。かつて漁港課長就任の間、水産課職員との関係も深く、魚類について若干の知識を得ることができたので、鮭の稚魚放流にもスムーズに入れた。初めてのことに挑戦するのは、恐らく多くの人がワクワク感を抱くと思うが私もその一人である。

標題の発眼卵着床実験に至った経緯は次の通りである。古くは平安時代の頃から長野県上田、松本まで秋になると鮭が遡上していた記録があり、その数2万尾という自然豊かな河川であった。昭和10年代に始まった国策の電源開発事業により発電用ダムが造られると、川の水量が極端に少なくなり、魚類の遡上、降下ができなくなると共に多くの水生生物が住み処を失い川の生態系は極端に疲弊していった。

1997年、これまでの河川法の治水、利水に環境が加わり、これを受けて「信濃川中流域水環境改善検討協議会」が設けられた。長い間の議論の末、減水区間の水量回復が見込まれたことから、当会では自然豊かな川指標の一つ鮭の遡上を夢見て、2007年3月に千曲川、信濃川にて鮭の稚魚放流を開始した。2007～2012年の6年間で1285千尾の放流をおこなった。

その結果宮中ダムにて、これまでほとんど遡上が見られなかったが、2009年160尾、10年146尾、11年135尾、2012年297尾と遡上数が増えた。

2012年10月からは、新たなステップに再度三井物産環境基金の助成を受け、これまでの4～5cmの稚魚まで飼育してからの放流に加え、できるだけ自然産卵に近い手法である発眼卵を河床に埋め込み、自然にふ化、仔魚、稚魚に生育して降下してゆく発眼卵着床実験を浦野川でおこなった。

この手法は、北海道でおこなわれているが本州では初めての試みであり、(独)水産総合研究センター・日本海区水産研究所からの指導を受けながら実施した。

中が2段になった小さな虫かごのようなバイバードボックスの上段に発眼卵を200粒、下段に小石を入れて河床か

ら15cm掘って埋設し、ボックスの上に高さ5cmほどの小石をのせて周囲の河床にあわせ、自然ふ化、生育、降下させるのである。

2012年12月16日、長野大学の環境系学生の支援を得て大熊代表と一緒に13年3月放流予定の16万尾の内の1万尾を試験的に着床した。



大熊代表がお手本を見せて埋設は始まった

1月にボックス4個を開いたところ、生存率42～93%と開きがあった。これは埋設後、上流域で河川工事がありその泥がボックス内に多く付着していた。またボックス内には、死卵もあったが生卵、仔魚も多く見られ全体的に発育遅延であった。おそらく上田市の冬季の気温からして、水温の影響を受けていると思われる。



まだ小さいが確実にふ化した鮭の仔魚

3月にボックス3個を開いたところ、浮上率8～80%と大きな差が生じていた。これは泥の進入により死卵、仔魚の窒息死と推測される。当会の埋設ボックス2個を開いたところ、95%が浮上したと思われる。埋設場所により差があるのは、河床地形、流速、水温など多くの要素が作用しており、詳しくは別途に報告したいと考えている。

世話人 山岸 俊男

この活動は三井物産環境基金の助成を受けて実施しました。

清流回復 3号のエンジン復旧と船小屋建設

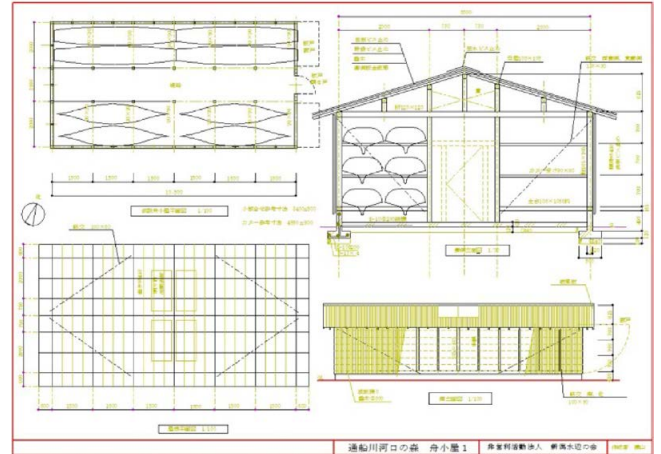
昨年6月に通船川河口の森船着場に係留していた3艇の当会のボートから100馬力、10馬力のエンジンが盗難にあいました。100馬力のエンジンは清流回復3号に搭載させていたもので、10馬力のエンジンは清流回復1号に搭載されていたものです。清流回復3号は川親水活動支援船であり、清流回復1号は川掃除船として活躍をしていました。盗難の原因は色々考えられますが、詰まる所、私達は世間知らずだったということに尽きます。世間知らずが川再生を語るな!と言われれば全くその通りなのでした。驚天動地、茫然自失から立ち直るには暫らく時間がかかりましたが、この事件から何を学び、再出発できるのかについて語りたと思います。



今年6月の信濃川親水活動で軽快に動く
“清流回復3号”の新エンジン

現在、清流回復1号はボートの整備等でお世話になっているボート屋さんの好意で無償の8馬力のエンジンを貸してもらい、川清掃活動に支障は出ていません。また清流回復3号の100馬力エンジンは140万円もするもので1年を掛けて会員、支援者から寄付をいただき今年3月に新たなエンジンを購入、復旧させることができました。改めて寄付をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

川親水活動は市民的な親水活動としてのカヌー川下りを安全に実行するために清流回復3号を伴走船とすることで構想されました。しかし現在、伴走船は稼働ができるようになりましたが、カヌーの数、そしてそれを河口の森船着場に収納する船小屋の建設が課題と



なっています。ありていに言えばどちらもお金の問題です。

船小屋を建設できなければカヌーを増やす気持ちになれません。船小屋の建設費は第1段階として130万円と見積もっています。ようやく新潟県のNPOサポートファンドから建設費として47万円が助成されましたが差額の見通しが無い状態が続いています。そこでわがままな願いを再度皆様にしたいと思いました。船小屋建設費130万円、助成金47万円の差額約80万円を皆様からも支援をお願いいたします。

川再生活動はこれから親水活動の本格的な展開を後押しに、川関係当事者との厳しい対話の場の形成へと進みます。その一方の当事者として当会も当事者資格を問われます。その時、世間知らずではお話になりません。世界と日本の趨勢を知り、汗を流し身銭を切つてまで実現したい価値を語れる者として向き合わなければなりません。その目に見える事実の一つとして市民の親水活動があり、それを支える船小屋があります。これを実現したい。この志を了とし皆様からの支援を賜れば幸いに存じます。

振込銀行 新潟県労働金庫本店
普通口座 口座番号 5007778
名義人 特定非営利活動法人
新潟水辺の会
代表世話人 大熊 孝

世話人 横山 通

河川のオープン化について (通船川)

これまで信濃川の「やすらぎ堤」にテーブル、椅子を設えて、川風を受けながらコーヒーやビールを味わう風景を何度か見たことがある。見るだけでもゆったりとした何とも言えない気持ちにしてくれる。時間があつたら自分もそこに座って、コーヒーなど、友人と一緒にビールをかたむけ語りたい気分になる。



万代高校端艇部の練習風景

そんな風景が通船川の河口の森でもできるようになる。通船川では、万代高校の端艇部がカヌーの練習を毎日のようにやっているの、水面をミズスマシのように進む姿を楽しみながら、また、彼等が休憩に陸に上がったときには、会話もできる魅力的なエリアを夢見ている。

国土交通省は河川の占用について、これまで公共・公益性のある者で、公的主体が原則となっていたが、地域の活性化を図るため河川敷の占用緩和に踏み切り、平成16年度から全国各地でその社会実験(特例措置)を実施してきた。

平成23年度からは、特例措置を一般化し地域の合意を図った上で、地域活性化に資する施設を民間事業者も含め占用させることが可能となったのである。

通船川では、水辺の会による月1回の清掃活動や水辺の愛護団体、万代高校端艇部などの活動が活発におこなわれており、その活用レベルは高いものである。また「つくり市民会議」の活動は、市民、企業、行政を含む幅広い方々、そして地域の児童も参加しての活動は、他に例を見ない意識の高いいろいろな実践活動をおこなっている。

一方沿川地域での地域活動も恒例となって、栗の木川さくら祭り、三世代交流会灯ろう流しなど年を追う度に参加者も増加して盛んになっている。

これらは新潟県が通船川の整備にあたって、治水目的の護岸だけでなく、場所によって階段護岸や親水護岸、河川公園など「つくり市民会議」を通じて地域の意見、要望が反映された結果でもある。

このように護岸等の整備が進展してくると、水面等の利用が活発になってきて地域が活性化されつつある。これまで、これらの活動に深く関わってきた当会は、この制度を利用して通船川の河川敷地占用によって、艇庫等の建設が可能になる。

平成24年2月9日に第1回の新潟地域河川敷地利用調整協議会が開催、引き続き3月27日に第2回同協議会が開催され、民間事業者の占用が可能となる結論を得た。

その後、県報告示が4月か5月と言われていたが、国土交通省北陸地方整備局との調整から遅れに遅れて、平成25年3月19日ようやく当該地域の県報告示が発せられた。

これからは、当会が通船川における清掃や市民カヌー教室等の活動に使用する船の船小屋建設にあたって、占用申請をすることにより、速やかに許可がでることになった。



中央の駐車場奥が船小屋予定地

今後は、船小屋建設のための資金集めをおこなって、一日も早く船小屋の建設をして、川清掃や市民カヌー、万代高校端艇部の活動などが活発になることを期待している。

世話人 山岸 俊男



report

ちよくはん

「私の職業」～直播農法による米づくり～

職業は何をもって決めるのでしょうか。その人の経済的な基盤を云うのでしょうか、日常的に費やす時間の多さなののでしょうか、はた又その人の精神的な“張り合い”みたいなことを云うのでしょうか。

私の場合、1年の内4月～9月の半年間は農作業をしています。

半年間の農作業は、稲作が主たるものですが、畑作（野菜）、ソバ、ナタネも栽培しております。畑作は自家用野菜、ソバはJAに販売、ナタネは菜種油がとれます。農場は新潟市西蒲区馬堀の自宅付近に稲作、畑作、ナタネを栽培し、40km程離れた柏崎市宮川地区みやがわには、9.8haの耕作面積のうち、稲6ha、ソバ2haを作付し、残り1.8haは生産調整（減反）しております。

宮川の農場は、沢水を貯めた約1haの農業用タメ池があり、それを水源とした天水田です。宮川集落では、高齢化のために離農した農家が99%という状況で、今ではこのタメ池の水は、私どもの農場が独占しております。（申し訳ないが、恵まれていると思います。）



宮川地区の農業用タメ池です。

今でこそ美田と云えるようになりましたが、最初は1反歩の田が3～4枚で、大部分がヨシの生えた荒廃田の状態でした。その荒れた土地を自分で圃場整備をいたしました。土木屋だった現役時代の経験を生かし、自分で重機械をリースして整備を進めてきましたが、今日まで18年間もかかりました。母方の祖父が、旧西蒲原郡の鎧潟を干拓したメンバーの一人ですので、自分にはその血が流れているのかなと思っています。

そんな愛着の深い田んぼが、今では田植えに依らない直播（じかまき、ちよくはん）で稲を育てる美田となりました。直播とは、稲の種子を直接田の表面に播く農法で、専用の機械の導入により、1日当たり3haくらいは播くこ

とができます。

最近の農機具の発展は素晴らしいものがあります。春耕に使用するトラクタは、乗用車同様の運転席が装備され、エアコン、オーディオなどの装備もすごいのです。作業幅3.5mのトラクタが、田んぼに水を張った水面に、山桜の花びらが花吹雪となって舞い落ちる中を進んでゆく光景を、思い浮かべてみてください。私にとって至福のシーンであり、農業に“張り合い”を感じるひとときであります。



宮川地区の農場の水田です。

近年の稲作は、田植えの時期が早くなって、夏の高温期と米の熟成期が重なり、食味が落ちると云われております。その点直播農法は米の熟成期が遅れるため、高温が米の食味に与える影響が少ないと云われております。また、直播農法はきれいな米ができるので、1等米比率が多くなります。

このように気温や水温が農業に与える影響は深いのです。例えば、種籾は秋に収穫して乾燥し、春に使用します。春に使用する際に、休眠打開するため水に浸しますが、積算温度（日平均水温の足し算）が40～60℃より少ないと発芽が遅く、多いと発芽過多になります。稲に穂が出てから刈り取りまでの積算温度（日平均気温の足し算）は、約1,000℃とされております。稲作は数字的に管理されている面が大きいのです。

春、山桜の花吹雪の下での農作業は、いつも私に“安らぎ”と次なる“張り合い”を与えてくれます。その人の職業を判断する条件を精神的な“張り合い”に求めるとしたら、私の職業はやはり農業と云うことになるのでしょうか。さあて、明日はスポーツカーで、農場へゆくか！

相馬 九二市

当会活動資金の多角化を構想する～新潟市地域活動補助金を巡って

新潟市地域活動補助金を受けて通船川清掃、及び親水活動を始めて今年で通船川清掃は5年目、親水活動は3年目となりました。川清掃も親水活動も始めた当初は資金の裏付けがなく、この資金が非常に有難かったのですが活動が継続していくに従い、この資金への依存が高まってゆく不自由度も高くなっています。この問題は当会の自立問題と重なり、かなり本質的な課題として意識されはじめています。

活動資金をどうやって捻出するか、そして相対的な自由度をどう確保するかはNPOの独立性、及び存在理由に関わる問題です。日本の非営利活動はアメリカなどのような宗教的なバックボーンを持たない脆弱な基盤の上に始まった歴史的限界があり、現在継続しているNPO活動がその可能性を切開いてゆくラッセル車としての位置づけにあります。

そのことは日本社会の中に家族集団と会社集団しかない環境でありながら、そのどちらも帰属集団としての機能が分解過程にあるなかで新たな中間集団として、信頼のおける集団になりうるのかという課題すら担っていると考えています。

NPOは目的集団であることで会社と似ていますが、その目的が市場経済に短期的になじまない課題を担っていることが多く、市場から資金を導入できる可能性が少ないことから多くは助成金、補助金に頼った運営をしてきました。

そのことがNPO活動の独立性、持続可能性を失わせ、目的だけは立派でもその実現可能性に対する信頼を獲得できない悪循環に陥り、ただの趣味集団と変わらない姿となる危険性を強く持っています。

当会も具体的な目標を明確にし、結果を検証しながら、結果を出せる中間集団はどうしたら可能を考える風土形成とその試行、実現が必要な時期に差し掛かっていると思います。

市場経済の枠組みの中に生きながら市場経済を超える価値を目標にするということは矛盾していますが歴史は常にこの矛盾の中から生み出されてきました。これが不可能な社会は停滞没落するしかありません。社会の構成員が分断・孤立化し、個々の利益だけを求める社会はその内実を失い、社会的安心を必要とする課

題に対して無力無能です。社会的安心、それは社会がそれとして成り立たせている持続可能な基盤の保守保全です。当会の目標で言うなら自然の一つとしての水辺の回復でしょう。



近江八幡の営業川舟、新潟市の川にもこれが欲しい

当会が現在非力で目標達成能力が不足していると自覚できるならばその能力高める作法の開拓を始めなければならない。助成金はありがたくいただくにしても、それだけに依存することのない多様な稼ぎと寄付行為を受け得る体質に改善すること、そしてなにより小さくとも結果を出すことを目標としなければなりません。

稼ぎであれ、寄付を受けることであれ、第三者は当会が社会に対して有効な働きが出来るかを見ている。そして当会構成員が本気で目標達成に献身しているかを見ている。それができなければ第三者からの支援を期待するなど論外です。

通船川清掃、川親水活動を稼ぐことができ、寄付を受けただけの内容とできるのか？小さくとも目標に近づく結果を残せるのか？そして、そのことで担保される持続可能な社会文化として第三者を納得させることができるのか？これらのことが当会の助成金、補助金から始まった活動の転換点であり、超えるべき課題となっていると感じます。この機会に会員の皆様にもこの課題をご認識し、お考えいただきたくお願い申し上げます。

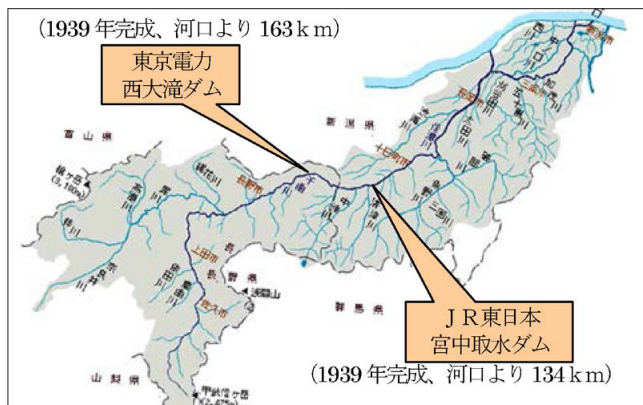
世話人 横山 通

通船川の川掃除、親水活動は新潟市の「地域活動補助金」の助成を受けて実施しました。

信濃川・千曲川に鮭を遡上させる活動

◆ 助成申請で長年の夢を実現に

この活動は10数年前より石月副代表が機会あるごとに提唱していた事業である。昭和10年代に始まった国策の電源開発事業によるダム建設で、川の水量が激減し、信濃川上流部から鮭の姿が消えた。



信濃川水系と中流域の二つのダム

本活動は、漁業としての鮭漁の復活を目標とするものではなく、信濃川の水量が回復し、長野で産卵・孵化した鮭の稚魚が安全に日本海まで降り、再び成魚が河口新潟から長野まで遡上できる環境を整え、信濃川の生物循環経路を復活させ、本来の川に復元させようとするものである。2005年秋、独立行政法人の地球環境基金にその助成金申請を行った。申請は上下流域の連携を条件に助成が決定した。

翌2006年より3年間、まずは信濃川・千曲川の河川環境の基礎調査を行うことから始まった。当時長野県には長年付き合いのあった長野水辺保全研究会があり協力をしていただき調査活動を実施した。

かつて長野県は1980年から21年間、千曲川に鮭の遡上を復活させるため1億6,000万円で鮭の稚魚899万匹の稚魚放流を行う「カムバック・サーモン」キャンペーンを行った。そのため長野県内の多くの小学校で稚魚を育成し放流を行った。だが、鮭遡上と言う成果を上げず事業を終えた。その経緯の中で、大きなトラウマを抱えたことを後で知った。それは大きく分けて2つあった。

1. 上流の長野県で稚魚を放流しても、下流の発電用タービンに巻き込まれて全部死んでしまうのではないかと。それは児童の教育に良くないことで止めるべきだ。
2. 鮭が大きくなって故郷に戻りたくても、下流の新潟でその鮭を全て採ってしまうのではないかと。

その後2009年より2011年の3年間、三井物産環境

基金の助成金を受けて、本当に鮭の稚魚がタービンに巻き込まれたら全滅するのであるかの調査を、新発田市の赤谷発電所（単輪単流渦巻横軸フランス水車、有効落差49m、直径0.69m）を使わせていただき、毎年鮭の稚魚1000尾を放流して実験を行った。

実験結果は、元気な稚魚がタービンを通っても半数は生存して下流まで行くものであった。また、発電用取水口に泡などの迷入防止装置の効果調査でも、一定の効果が認められた。

また、シンポジウムや稚魚放流の機会を活用し、最下流の信濃川漁協では、長野へ鮭が遡上する9月下旬から10月下旬まで信濃川での鮭の捕獲をしないで全部上流に遡上させている。さらに捕獲用の網も川を全面的に閉切らない流し網で行い、全ての鮭を下流で捕獲しているのではないことを説明している。この他、信濃川沿川市町村からの補助金や地球環境基金、その後の三井物産環境基金で、長野県の地域住民の方々と一緒に145万尾の鮭稚魚放流をこれまでにに行った。

これらにより徐々に本活動を理解してくれる長野県の地域住民の方々が出てきた。だが、頼みであった長野保全研究会の方々も高齢化等で依頼できなくなり、長野県での協力団体が無くなった。しかし、鮭は正直者で平成22年10月20日と翌年の11月13日の2回、信濃川河口より253kmにある上田市千曲川の同じヤナ場に発見され、長野県で大きな話題となった。

◆ 今後の活動

近年、信濃川、千曲川でも二つのダムからの維持流量の増大、魚道の改修工事、迷入防止装置の設置が行われ、鮭の遡上数も徐々に増えてきた。また、稚魚放流で協力をいただいている上田市の上小漁業協同組合、上田・道と川の駅 おとぎの里の石井孝二氏を始め、長野県での鮭遡上活動も認知されつつある。

これまで河川環境改善の糸口として人工孵化による鮭の稚魚放流を行ってきた。今後は、人工孵化放流を行いつつも、自然に委ねた鮭の自然産卵を最終目標とし、長野県の方々が主体となった遡上活動を側面から支えてゆく活動を目指していく。

事務局 加藤 功

この活動は三井物産環境基金の助成を受けて実施しました。

新潟水辺イベント情報

○湊まち新潟歴史ウォーク 2013
～水運で活用されている水路散策・通船川～
8月24日(土) (募集は終了)

○第4回信濃川大河塾～信濃川(千曲川) 源流を訪ね、源流と最下流の「みずつち」を考える旅～
8月26日(月)～27日(火) 参加費:12,000円
(1泊2日4食、交通費含む)

宿泊:白木屋(長野県南佐久郡上川村)
募集:40名
締切:8月15日(定員になり次第、募集締切)
問合せ:新潟水辺の会事務局 025-264-3191
メール:ecoline@mvd.biglobe.ne.jp

○つうくり市民会議
9月28日(土)(開催場所は未定)

この本を読めば、あなたはもうドクター・サーモン! 「サケ学大全」出版のお知らせ

生物としてのサケの魅力はもとより、サケ漁業と孵化放流事業などの産業科学的視点、先住民の生活のなかや日本の伝統的食文化としてのサケなどの社会科学および文化的視点、などさまざまな視点からサケの魅力に迫ります。サケのミニ百科事典としての魅力満載です。

また、大熊会長が第6章の一部「水涸れの信濃川に『鮭の道』を拓く」を執筆しています。

サケ学大全
編著: 帰山雅秀・永田光博・中川大介

この本を読めば、あなたはもうドクター・サーモン!
生物としてのサケの魅力はもとより、サケ漁業と孵化放流事業などの産業科学的視点、先住民の生活のなかや日本の伝統的食文化としてのサケなどの社会科学および文化的視点、などさまざまな視点からサケの魅力に迫ります。サケのミニ百科事典としての魅力満載です。

【目次】
第1部 サケの生物学
第1章 [生態学]、第2章 [生理学]、第3章 [遺伝学とバイオテクノロジー]
第2部 サケの産業科学
第4章 [水産資源学と経済]、第5章 [食と機能性物質]
第3部 サケの社会科学
第6章 [先住民とサケ文化]、第7章 [サケの多面的利用]

定価 2,520円(税込)
A5判・312頁 ISBN978-4-8329-8210-9 C3045

著者紹介のご案内
対象:著者のご紹介に同意する
※著者紹介と相違しないことをご注意下さい。
別紙印刷:紙と印刷(送料別)送料別(送料別)
送料:送料は送料別(送料別)送料別(送料別)
送料別(送料別)送料別(送料別)送料別(送料別)

北海道大学出版会
Tel: 011-736-8605 hupress@hup.gr.jp
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目目北大構内

「サケ学大全」
帰山雅秀・永田光博・中川大介 [編著]
第I部 サケの生物学
第1章 [生態学]、第2章 [生理学]、第3章 [遺伝学とバイオテクノロジー]
第II部 サケの産業科学
第4章 [水産資源学と経済]、第5章 [食と機能性物質]
第III部 サケの社会科学
第6章 [先住民とサケ文化]、第7章 [サケの多面的利用]
定価 2,520円 (税込)
問合せ: 北海道大学出版会
FAX: 011-736-8605 mail:hupress_8@hup.gr.jp
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目目北大構内

編集後記: 水辺の会の会員も全国に居ますが、大学生時代、会の専従スタッフとして働き、現在、大分在住の寺村淳君(奥様の真純さんも会員です)が8月から大分大学経済学部地域システム学科の講師になります。学生に地域での体験活動の指導をするそうです。今後、楽しいレポートが期待出来そうです。

新潟市内には「水辺の会」のほかに、新潟のまちを案内する「新潟シティガイド」、まちなかの活性化を目指す「まちなか同志隊」、チューリップの花を生かした「新潟花絵プロジェクト実行委員会」など、様々なまちづくり団体が活動していますが、市民の一人ひとりが、自ら望む将来のまちの姿を描き、地域課題の解決に向けて自主的・自立的に取り組む「志民委員会 N・Vision プロジェクト」が3月に立ち上がりました。この会は魅力と活力のある新潟市の実現に向けて“志”を持って議論を深め、行動する人であれば、誰でも参加出来る会です。当面は2019年の新潟港開港150周年を目指して、5つのプロジェクトで活動を始めました。「ひとつづくりプロジェクト(P)」「地域経済活性化P」「食と農のネットワークP」「夢・ビジョンP」「開港150年まちづくりP」です。10月にはオープンイベントを開催予定です。私は「開港150年まちづくりP」のリーダーをやっています。興味のある方は事務局(新潟市地域・魅力創造部、担当:相崎さん) 電話 025-226-2146、E-mail: chiikimiryoku@city.niigata.lg.jp までお問合せください。 編集人: 森本 利

●発行: 特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局

〒950-2264 新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方 Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org/> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員 177名、法人会員 9団体、顧問 8名 (2013年6月13日現在)